

マレーシア

マレーシアプトラ大学
海外研修に関する報告

高知大学

人文学部国際社会コミュニケーション学科4名

人文社会科学部国際社会コース 1名

滞在期間：2016年8月30日～10月1日

●マレーシア海外研修プログラムについて

<プログラムの目的について>

本研修は、2016年8月30日～10月1日、高知大学の協定校であるマレーシア・クアラルンプールにあるプトラ大学（University Putra Malaysia）併設の語学学校 ELS Language Center が実施する英語コースを4週間受講するプログラムです。また、2017年度設置予定の共通教育科目「グローバル・コミュニケーション」の試行プログラムとして、国際連携推進センターが中心となって企画しました。

マレーシアは英語を準公用語とする多民族国です。本研修では短期集中の英語学習のほか、国際色豊かなクラスメートとの交流、多民族国家マレーシアの文化・自然遺産への訪問等を体験し、英語力のみならず異文化理解力を高めることが目的です。

<ELS 語学学校について>

Level101～109の9コースがあり、それぞれ Structure&Speaking Practice、Reading&Writing、Vocabulary Enrichment の項目に分かれています。レベル分けのための Placement Test が到着してから実施され、クラスに分かれて研修を行います。万が一レベルが合わないと感じた場合もクラス変更を行う事は可能であり、4週間で1コースが完結するプログラムです。受講者の国籍は中国、タイ、インドネシア、イラク、シリア、サウジアラビア、エジプト、リビアなど様々で1クラス20人ほどで構成されています。一方的な講義形式ではなく、ペアワーク、グループワークによるディスカッションやプレゼンテーション等アウトプットを行う機会を多く設け、双方向のコミュニケーションを図るプログラム内容です。

以下はこの研修に参加した5名の体験記（要約）です。

●人文学部国際社会コミュニケーション学科3年 足立 磨理奈

マレーシアでの生活を通して強く感じたのは、とても穏やかな国であるという印象です。マレーシアの人々はとても親切で、マイペースに日々を送っていました。イスラム文化には多くの決まりごとがあり、それらを厳格に順守することが求められているのではないかと以前は考えていました。しかし、実際は強制されているという印象を受けることは無く、日々の生活の中で当たり前のように決められている事を取り入れているにすぎないのだと感じました。今まで日本人の立場でしか物事を捉えることができず、イスラム文化を一つのイメージとして全てを判断してしまっていたように思います。また、1か月間の内、何度も自分とは違う価値観に出会い、それがストレスになることもありましたが、そういったストレスを自分の中でどう受け止めていくのが良いのか、マレーシア文化を様々な面から体験することを通して、今の自分に必要なことを発見できたような気がします。

●人文学部国際社会コミュニケーション学科2年 崎原 祥子

今、東南アジアでも急成長しており様々な国から人が集まる多文化国家のマレーシアで約一ヶ月間生活し、様々な体験をしたことでより深く異文化を体験し、理解することができました。また、“英語はアメリカ英語だけではない”ということを知られました。大学の生徒またはマレーシアにいる英語話者はほとんどがネイティブスピーカーではありません。中には流暢に英語を話せる者もいますが、大多数はマレー語、アラビア語、中国語や中東系の言語などの訛りが入った英語を話します。日本でずっとアメリカ英語の教育を受け、アメリカ英語に慣れた私にとって彼らの英語を聞き取ることはいつものリスニングとは全く違いました。私が言いたいのは彼らの発音が悪いかどうかということではなく、英語は多様に変化するということです。そしてその多様にある英語に応用することができるかどうかグローバル人材に求められるものの一つとしてあるのではないかと思います。

●人文学部国際社会コミュニケーション学科2年 酒井 裕理佳

自分よりも、日本についてよく知っている人が語学学校には多く居たことに驚きました。多くは文化についてですが、なぜ日本は～なのか？と聞かれても答えることが出来ないことが何回もあり、説明できない事が悔しかったです。「自分は日本人だから当然理解している」ということを前提に考えていたため、そのようなことが起きてしまったのかもしれませんが。異文化を持つ人々と接する際に、接するその異文化について事前に理解しておく必要はもちろんありますが、自分の文化も十分に理解しておくことが必要であると身に染みて感じました。どんなに他国の文化について知っていたとしても自分の国の文化を理解していなければ異文化コミュニケーションは成立しないと実感しました。

●人文社会科学部国際社会コース1年 岡崎 希

私は1か月のマレーシア生活で英語力はもちろん、文化面でも素晴らしい経験ができました。イスラム教国家であるマレーシアでは、朝、晩2回コーランが流れ、学校の至る所にお祈りをするための部屋があります。また、金曜日の午後はお祈りのために学校もお休みでした。モスクでは、女性に髪や肌をすっぽり隠す服を着用するよう指示がありました。またマレーシアは多国籍国家であるため、中国の寺院、ヒンドゥー教の寺院もあり多くの宗教を感じる事ができました。研修期間に参加したお祭りハリ・ラヤ・ハジ（犠牲祭）では、牛の解体が行われていました。日本では牛などの動物を解体、殺すということを大人の前ではもちろん、特に子供に見せることを嫌がりますが、マレーシアの子供や大人はどうやって生き物が殺され私達の食事になるかを知っています。私たち日本人のほとんどは知りません。私はこのお祭りに参加して、命を貰っているということ改めて知りました。日本には経験することの出来ないことを経験することが出来ました。

●人文学部国際社会コミュニケーション学科2年 杉本 渚

海外に行くのは、その国の文化や習慣を肌で体験できるというほかに、日本の素晴らしさを改めて実感できるというメリットがあると思います。日本での当たり前が、諸外国から見ると非常に恵まれていることだという気付きは、自身の考えを成長させてくれるものでした。また、マレーシアでの生活を通して、慣れない環境下でどのように自分が行動すべきかということをよく考えました。この1か月間、私は何事にもポジティブに取り組もうと決意し、各場面で感じた反省は次の機会には成功できるように前向きにとらえ、挑戦するようになりました。海外では、積極性が大事とよく言われますが、語学学校の授業を受けその言葉の意味をひしひしと実感しました。日本では、周りの空気を読むという場面が頻繁に見られますが、海外では違います。「人は人、自分は自分」と割り切った姿勢を持つアジアや中東諸国の生徒にたくさん出会い、自身の意見を持ち、それを発信することの意味を改めて感じさせられました。

【マレーシアにある寺院】



【マレーシア料理の一つ、ニョニャ料理】



【イスラム文化に則った学内での服装の説明】



【首都クアラルンプールの風景】

